

名寄市立大学

授業改善通信

第1号 (2018年9月発行)

目次

1 実施までの流れ	1
2 授業評価アンケート実施・結果の報告	1
3 授業改善活動報告 連携教育科目「地域との連携Ⅰ、Ⅱ」におけるルーブリック評価の試み	4
編集後記	6
アンケート結果を踏まえた分析・改善案 (別冊)	



1. 実施までの流れ

平成30(2018)年度前期の授業評価アンケートをWebで実施した。本学にとって初めてのWebによる実施であることを考慮し、今回は、アンケートの対象となる科目数を専任教員一人当たり1科目に限定した。

昨年度に策定した実施案を5月17日の授業改善ワーキンググループ(WG)で確認し、その案を5月21日の内部質保証推進委員会に提出、6月教授会で実施案の説明を行い、7月教授会では実施日程等の追加説明を行った。また全学生メールを利用して学生に実施の趣旨と方法を周知し、アンケートへの協力をお願いした。

アンケートの実施期間は、7月17日に大学サーバーの交換作業があったため、7月19日～8月2日(補講期間最終日)とした。この期間以前に終了した授業については、学科の掲示版を利用して科目名を受講者に伝え、アンケートの協力を求めた。

集計結果がWebで瞬時に表示されるので、授業担当教員には結果閲覧用のユーザーIDとパスワードを使ってログインし、アンケート結果を踏まえた分析・改善案を書いてもらった。寄せられた分析・改善案はすべてこの『授業改善通信』の別冊に収録している。今回のアンケート結果を踏まえて次年度の授業でどのような改善がなされたのか、次年度のアンケートの際にぜひ検証して報告していただきたい。

この授業アンケート以外にも授業改善に向けた取り組みが行われている。その一つとして、連携教育科目「地域との協働」のルーブリックによる学修把握がある。連携教育委員会によるこうした取り組みについての報告を『授業改善通信』に収録した。ルーブリック評価を取り入れる際の参考資料として活用していただきたい。

なお、この『授業改善通信』はインターネットを通じて公開(分析・改善案のみ学内限定)する。

2. 授業評価アンケート実施・結果の報告

(1) 実施案の策定

昨年度WGは授業評価アンケートの実施案を策定した。策定にあたり、研究論文等を参照しながら、授業評価アンケートの基本的考え方として以下のカテゴリーを抽出した。

アンケート項目のカテゴリー

- ・授業の構成や成績評価方法に関する事前説明
- ・シラバスと実際の授業との一致
- ・教員の教授努力
 - 授業準備に対する周到さ（教材や配布資料、ICT 活用など）
 - 教員の伝え方の明瞭性（話し方、板書、スライド、実演など）
 - 授業の進め方
 - 受講者への対応（質問対応、課題提示など）
 - 授業環境の維持（私語・居眠り対策、授業時間の厳守）
- ・授業に対する教員の意欲や熱意

上記カテゴリーをもとに以下のアンケート項目を作った。

カテゴリーに応じた質問項目 4・3・2・1による評価 ☆講義・演習とも同一。

- 1) シラバスに記載されていた内容に沿って授業が行われていた。
- 2) 授業の構成について、あらかじめ十分な説明があった。
- 3) 成績評価方法について、あらかじめ十分な説明があった。
- 4) 授業に対する準備（教材や配布資料、ICT 活用など）は十分に行われていた。
- 5) 授業の進め方はわかりやすかった。
- 6) 教員の伝え方（話し方、板書、スライド、実演など）は明瞭だった。
- 7) 教員は授業環境の維持（私語・居眠り対策、授業時間の厳守）に努めていた。
- 8) 授業に対する教員の意欲や熱意を感じた。
- 9) 教員は学生に対して適切な対応（質問対応や課題提示）を行っていた。

授業に関して意見があれば、自由に書いてください。

☆「学生の満足度」については、内容が簡単、良い成績が付きやすい、宿題が少ないなど、学生の安楽さを「満足度」として評価する傾向があるため、項目を立てない。

(2) アンケートの実施状況

今回の授業評価アンケートが Web による初めての実施ということを考慮し、対象科目を1人の教員につき1科目に限定した。実施した教員の実施率は以下の通りである。なお、実施率を算出するにあたり、対象者を講師以上とした。

	アンケート実施率					
	栄養	看護	社会福祉	社会保育	教養教育	全体
H30 前期	83.3	38.8	56.2	61.5	88	60.2
H29 後期	84.6	29.4	64.7	46.6	100	60

直近で実施した昨年度後期の実施データと比較すると、全体の実施率は昨年とほとんど変わっていない。

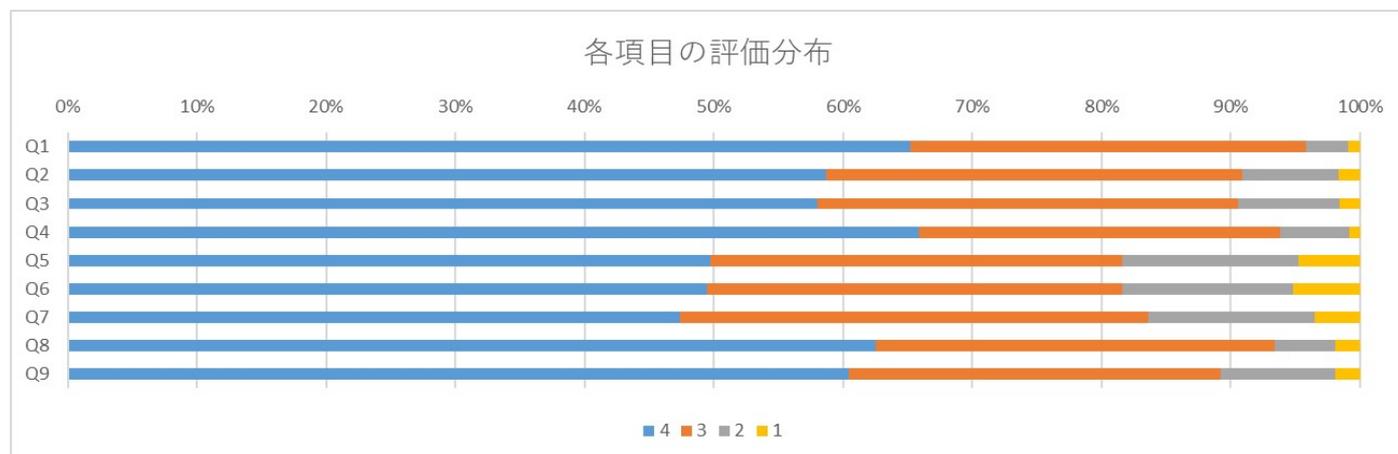
(3) アンケートの結果分析

次に各アンケート項目の集計結果を見してみる。

2018年度前期 授業評価アンケート 全体集計結果

回答率：61.2%

質問	4 件数 割合%	3 件数 割合%	2 件数 割合%	1 件数 割合%	平均 SD
1. シラバスに記載された内容に沿って授業が行われていた。	977 65.2	459 30.6	50 3.3	13 0.9	3.60 0.60
2. 授業の構成について、あらかじめ十分な説明があった。	880 58.7	483 32.2	111 7.4	25 1.7	3.48 0.71
3. 成績評価方法について、あらかじめ十分な説明があった。	870 58.0	488 32.6	117 7.8	24 1.6	3.47 0.71
4. 授業に対する準備は十分に行われていた。	988 65.9	418 27.9	81 5.4	12 0.8	3.59 0.63
5. 授業の進め方はわかりやすかった。	746 49.8	477 31.8	205 13.7	71 4.7	3.27 0.87
6. 教員の伝え方（話し方、板書、スライド、実演）は明瞭だった。	742 49.5	481 32.1	198 13.2	78 5.2	3.26 0.88
7. 教員は授業環境の維持に努めていた。	711 47.4	542 36.2	194 12.9	52 3.5	3.28 0.82
8. 授業に対する教員の意欲や熱意を感じた。	937 62.5	463 30.9	71 4.7	28 1.9	3.54 0.67
9. 教員は学生に対して適切な対応を行っていた。	906 60.4	432 28.8	132 8.8	29 1.9	3.48 0.74



分析

2018年度前期は平均3.26～3.60の範囲に留まり、前年度との比較はできないが、最高点が4点ということ considering すると、概ね高い評価であったと判断できる。各教員が日頃の授業改善の努力によって表れた評価とも受け取れるし、この授業評価アンケートに協力した教員が、もともと授業に関心のある群だったとも考えられる。さらに今回は、1教員1～2科目の自己申告制だったため、もっとも自信のある授業をアンケート科目に指定して授業評価に臨んだといった可能性も否定できない。いずれにせよ、初めての取り組みであったので、これをベンチマークとして継続的に比較検討し、教員参加率や科目実施率を向上させていくことで、やがて詳細が見えてくるものと予想される。

次に項目別の評価では、質問5、6、7が平均値の下位3項目で、かつ標準偏差(SD)の上位3項目となった。これらに共通するのは、教員の授業中のスキルに関する評価であり、相対的にやや低い結果でありながらも、科目間で差が出やすい箇所であることがわかった。授業中のスキルの改善に関しては、グッドプラクティスの紹介やピアレビューといった、授業場面を何らかの形で公開する取り組みが望ましい。開学から4年ほどは、過去に存在した授業改善委員会でこのような活動を進めていたが、年々参加者が減少傾向にあった経緯もあり、取り組みを復活させるかどうかは慎重に検討する必要がある。

(4) 次年度の課題

学生への周知については7月教授会後の7月13日、全学生メールを通じて行った。アンケートに対する学生の意識・関心を高めるために、今後は新入生ガイダンスや在校生ガイダンス等でアンケートの意義を伝え、協力を呼びかけたい。

実施科目数と回答率の向上が今後の重要な課題となる。今回のアンケートは1人1科目に限定したが、今後は複数科目でのアンケート、将来的には実習等一部の科目を除いた全科目での実施を目指したい。また、今回のアンケートでは10%未満の回答率のものが数件あった。7月17日以前に終了した授業については、科目名と実施方法を各学科の掲示板に貼りだし受講者にアンケートへの協力を求めたが、回答率は9科目のうち6科目が10%未満だった。7月教授会で説明したように、できるだけ授業の最後の数分間を回答する時間として確保するなど、回答率を高める工夫が必要である。

今回のアンケートの実施科目数は49科目。アンケート結果の分析と今後の改善案が寄せられたのは、21件に留まった。こうしたコメントは改善活動を可視化する重要な取り組みの一つでもある。アンケートの実施だけでなくコメントの記入も忘れずに行っていただくよう各教員にお願いする。

3. 授業改善活動報告 連携教育科目「地域との協働Ⅰ～Ⅱ」における ルーブリック評価の試み

平成26年12月に示された中教審の「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について(答申)」では、高等学校教育、大学教育を通じて育むべき「生きる力」と「確かな学力」について明確化している。まず「生きる力」を、①豊かな人間性、②健康・体力、③確かな学力の3つで構成すると定義し、さらに③確かな学力を以下の3つに分けている。

- (i) これからの時代に社会で生きていくために必要な、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度(主体性・多様性・協働性)」を養うこと
- (ii) その基盤となる「知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」を育むこと
- (iii) さらにその基盤となる「知識・技能」を習得させること

従来のような、知識量を問うテストや技能の習得度を見る実技試験は(iii)の評価に対応でき、レポート課題は(ii)の評価に若干対応できるが、いずれの方法も(i)の評価には対応できない。これは、今までの日本の大学教育は(iii)に偏った授業と成績評価になっていて、(i)や(ii)を重視した授業とそれを評価する方法が不十分だったことが指摘される。そこで登場したのがアクティブ・ラーニングである。アクティブ・ラーニングは溝上慎一によると「一方向的な知識伝授型講義を聴くという(受動的)学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと」を指し、この能動的な学習を評価する手段として注目されたのがルーブリックである。

ルーブリックとは、「パフォーマンスの成功度を示す数段階の尺度と、それぞれの評点、評語に対応するパフォーマンスの特徴を説明する記述語から構成される評価基準表」のことで西岡加名恵は述べており、特に(i)(ii)の評価に適している。ルーブリックの例として、小論文の作成に関する評価を簡単に示すと表1のようになる。

ここでは小論文作成で求められる観点を定めて、それぞれ4段階の評価基準を設けている。ルーブリックを用いることで (i) (ii) の評価に対応できるだけでなく、教員間における学習目標と評価基準の統一化を図ることが可能になる。例えば、基礎演習は複数の教員で担当し、小論文の作成を共通の演習課題として取り組んでいるが、評価に関しては各担当教員の裁量に委ねられており曖昧になりやすい。ルーブリックを使えばどの学生でも共通の基準で評価されるので、ゼミ間の評価のムラは是正され真正な評価となる。

表 1 小論文作成に関するルーブリックの例

観点	4	3	2	1
文章読解	課題文の趣旨を理解し、要点を簡潔にまとめることができる	課題文から要点を抽出している	課題文には触れている	課題文に全く触れていない
日本語表現	文法や語彙を正しく用いて、自分の意見をわかりやすく述べている	文法や語彙を正しく用いている	文法や語彙に若干不十分な点がある	文法や語彙を理解できていない
説得力	適切な例示を用いて、設問に対する意見をはっきりと主張している	設問に対する自分の意見を述べている	自分の意見を述べているが主張がやや弱い	自分の意見を述べていない
...

本学におけるルーブリックの導入は、2016年度から連携教育科目（IPE）で行っている。IPEの学習目標は、英国 CAIPE が定義した「ケアの質とコラボレーションの向上」に倣い、本ルーブリックでも I：ケアの質向上、II：コラボレーションの向上の2本柱を定めた。そして、目標 I と II に対して各5項目の観点を独自に定め、観点毎に4～1までの評価基準を設定した。観点は目標 I に対して、①専門職連携の意義、②専門職の自覚・役割、③フィールドの理解、④対象の尊重・理解、⑤実践感覚・イメージの5つを定めた。目標 II に対しては、⑥参加姿勢、⑦自己表現、⑧他者理解、⑨集団活動の実行、⑩リーダーシップの5つを定めた。各観点の評価指標4は IPE で培われるべき資質能力を表し、1へ向かって達成度を下げている。例として①の評価基準を示す。

I ケアの質向上

① 専門職連携の意義

- 4：専門職連携の意義を様々な視点から幅広く理解している
- 3：専門職連携の意義を理解している
- 2：専門職連携の意義の理解に関して不十分な点がある
- 1：専門職連携の意義を理解できていない

このように⑩まで定め、1～3年次の「地域との協働 I～III」および「保健医療福祉連携論」の終了時に追記できるよう、A4 サイズの見開き紙面として作成したものが「連携教育カルテ」である。導入当初は、学習目標と評価の統一化を目指して、担当教員が所属学生をルーブリックで評価することを想定していたが、活動の準備や運営に精一杯で、一人ひとりを十分に見渡すのが難しいとの意見が挙がり成績評価には用いなかった。現在は、学生自身で自己評価や振り返りをしたり、次の学年の科目で達成度を比較検討したりするためのリフレクションツールとして活用している。また、カルテから Excel データに打ち直した差し込み印刷（指導用資料という別名を与えた）を、次の学年の担当教員に配布して学生の引き継ぎを行っている。

2016年度入学生には2017年2月に配布・回収、2018年2月に再配布・再回収した。なお、本調査は名寄市立大学倫理委員会の承認（受付番号 17-001）を得て実施し、地域との協働 I と II の両方で自己評価し

た 184 名を分析対象とした。そして、協働Ⅰで評価を任意とした項目を除外し、7 項目（①連携の意義、②専門職の自覚、③フィールドの理解、④対象の尊重、⑥参加姿勢、⑦自己表現、⑧他者理解）について、学科単位（栄養、看護、福祉、保育）で Wilcoxon の符号付順位検定による協働Ⅰと協働Ⅱの年次比較を行った。栄養では⑥⑦で有意差 ($p < .05$) が見られ、協働Ⅰでは他学科よりも評価が低かったことを注視していたが、協働Ⅱで克服できた結果となった。看護、福祉では、看護の⑧を除く全項目で有意差が見られ、協働Ⅱでさらに学習の達成度を高めた。そして保育では、①③④⑦で有意差が見られたが看護や福祉ほど顕著ではなかった。このことは、協働Ⅰの時点で保育は既に評価が高く、協働Ⅱでも達成度を維持できたと解釈するのが妥当である。

地域との協働Ⅰは学内演習を中心に連携の基礎を学び、地域との協働Ⅱは実際に地域に出て連携を実践する。このように、学内から地域へと段階を 1 年に 1 段階ずつ上げていくことで、学習の達成度の向上に各学科とも有効に作用したことが、ルーブリック評価の分析より明らかになった。2018 年度は 1 年下の後輩と連携して地域活動に参加しながら、リーダーシップやコーディネート等の能力を育む「地域との協働Ⅲ」、そして専門職連携へとさらに段階を上げた「保健医療福祉連携論」が開講されている。この 2 科目が終了して新カリキュラムが完成するため、3 年間の学びの成果を本学 IPE の成果として今後まとめていく。

【編集後記】

正確に言えば、『授業改善通信』は今号が第 1 号ではない。授業改善活動は本学が開学した平成 18 (2006) 年から行われており、年度末には『授業改善通信』第 1 号が発刊されている。目次を見ると、授業改善通信発行の背景、学生授業評価アンケート実施報告、本学授業の紹介、ピアレビュー報告、他大学の授業改善の紹介、といった充実した内容になっている。この授業改善活動の中心となったのが、開学時に発足した授業改善委員会だった。FD 委員会と連携しながらこの授業改善委員会が授業改善活動に取り組み、その報告を『授業改善通信』にまとめて年度末に発行していた。今読み返してみると、新しい大学作りの取り組みの一つとして授業改善活動が重視されていたことがわかる。年を追うごとに開講科目数が増え、完成年度には、一部の科目を除く全科目を対象にアンケートを実施していた。ところが、その後、諸般の事情からアンケートの実施規模が縮小し、毎年発行されていた通信も 2011 年度を最後に途切れていた。

『授業改善通信』は 7 年ぶりの発行となる。通算では第 6 号となるが、活動の再出発という意味を込めて敢えて第 1 号とした。内容的には前号までのものとは違ったものになっている。アンケートに関して前号までは実施方法の報告が中心だった。今号では、授業改善活動がより可視化できるよう、アンケートの各項目の学部平均点だけでなく、担当教員によるアンケート結果の分析・改善案（別冊）を掲載した。それらを読むと、真摯に授業と向き合い、授業改善に取り組む教員たちの姿が伝わってくる。また、分析・改善案を読み、授業に対する問題意識や改善活動の情報を共有することが大学全体の授業改善につながっていくと思われる。一度は途切れた『授業改善通信』ではあったが、今号を機に継続的に発刊していきたい。



発行日：平成 30 (2018) 年 9 月
 編集・発行：名寄市立大学・内部質保証推進委員会 教育質保証部会
 委員：石川貴彦（教養教育部）小古間甚一（教養教育部、チーフ）
 田邊宏基（栄養）松浦智和（社会福祉）